

事例7 校内居場所カフェの取組

●主な事業主体、連携主体

事業主体:NPO 法人 太陽の家

連携主体:三重県立北星高等学校、桑名市立明正中学校、四日市市社会福祉協議会

●現状、課題

校内居場所カフェは、「居場所に子ども達が来るのを待つ」のではなく、「子どもたちが普段いる場所に居場所を作る」というアウトリーチの発想から生まれました。

県内には子ども食堂等の居場所が増えてきましたが、距離が遠く車での送迎が必要など「子どもが自分自身で行ける場所が少ない」という課題がありました。また、情報が届きにくい家庭や、貧困支援の印象があり子どもを行かせにくいと感じる家庭もあるなど、全ての子どもが利用できる環境にはない事も課題にありました。

こうした課題を受けて、「子どもたちが普段いる学校に居場所があれば、どの子ども来られる居場所になるのでは？」と考え、校内居場所カフェの取組を始めました。

●取組概要

校内居場所カフェは、学校内の教室(1、2 室)を活用し、昼休みや夕方の時間帯や土日等に月1~3回程度開催しています。各校、利用者数は月30名~100名ほど。運営は、地域のNPO、社協職員、学校と連携して行っています。子どもたちが自由に立ち寄れる居心地のよい居場所を大切にしています。

【提供内容】

- ・一人席やグループ席等利用者が選べる机の配置。
- ・ドリンク、軽食、お菓子の提供。
- ・BGM を自由に流したり、遊びなどの小道具(おもちゃ、ボードゲーム・パソコン等)も提供し、生徒が楽しめ、気楽に過ごせる場を提供。
- ・静かに過ごすスペースや勉強スペース等、交流や騒がしさが苦手な子や、自分のことに集中したい子のスペースも用意。
- ・ちょっとしたイベントの実施。季節ごとの楽しいイベントや、学びや趣味に関するミニワークショップを開催。
- ・ボランティアスタッフによる見守り、交流、遊びや学びなどの提供。必要に応じて相談支援につなげる役割も担う。

●取組におけるポイント

【工夫した点】

- ・「誰もが来られる場所」にするため、多様な過ごし方ができるように席や小物等を工夫しました。
- ・「居心地のよい、安全安心な居場所」にするため、大人の関わり方について工夫し研修実施などで落とし込みました。
- ・「文化的体験」ができるよう季節行事や習い事等学びコンテンツを用意しました。地域のボランティアさんがそれぞれの得意を提供し、子ども達はさまざまな文化的な体験に触れる事ができます。
- ・「困る前に繋がり、困った時に頼れる」。居場所で自然と繋がり、カフェの回数を重ねることで信頼も積み重なり、困ったときに頼れる関係性が構築することができます。通常、相談する事はとてもハードルが高いものですが、気軽に相談できるようになりました。
- ・「スティグマを生まない支援」を実施しています。支援を受ける事は恥と感じてしまう人が多いですが、誰もが利用できる居場所にする事で、スティグマを持ちにくくなります。
- ・「卒業しても来られる」場所になれるよう工夫しています。卒業したら学校との関係も切れがちで、進学等の新しいステージに移ったときにそれまでの頼れる慣れた学校がなくなることは子どもにとって影響が大きいものです。校内カフェでは、卒業後もボランティアとして参加するなど、学校に戻って来られる場所として機能しています。
- ・「学校と地域の協力体制」を構築し、学校や NPO 単体ではできない子ども支援の枠組みを構築しています。子ども達が集まる場所(学校)で、地域の NPO の知見を活用し、子どもたちを地域で支える取組です。

●今後の展開について

学校内での認知度も高まり、校内居場所カフェに多くの子どもが参加してくれています。継続的な運営をしていくために、食材や人員等の確保が必要です。運営予算の提供や寄付募集の告知など行政等の積極的な関わりが求められています。

●本事例に関するお問い合わせ先

NPO 法人太陽の家

電話番号:0594-87-5169

メールアドレス:info@taiyounoie2015.com